

秋の田の かりほの庵の 苫をあらみ  
わが衣手は 露にぬれつつ

春過ぎて 夏来にけらし 白妙の

衣干すてふ 天の香具山

あしびきの 山鳥の尾の しだり尾の  
ながながし夜を ひとりかも寝む

奥山に もみぢ踏み分け 鳴く鹿の  
声聞く時ぞ 秋は悲しき

天の原 ふりさけ見れば 春日なる  
三笠の山に 出でし月かも

わが庵は 都の辰巳 しかぞ住む  
世をうち山と 人はいふなり

花の色は 移りにけりな  
いたづらに  
わが身世にふる  
ながめせしまに

これやこの 行くも帰るも  
別れては  
知るも知らぬも  
逢坂の関

天つ風 雲の通ひ路  
吹き閉ぢよ  
乙女の姿  
しばしとどめむ

筑波嶺の 峰より落つる 男女川  
恋ぞ積もりて 淵となりぬる

陸奥の しのぶもぢずり 誰ゆゑに  
乱れそめにし われならなくに

君がため 春の野に出でて 若菜摘む  
わが衣手に 雪は降りつつ

立ち別れ いなばの山の 峰に生ふる  
まつとし聞かば 今歸り来む

ちはやぶる 神代も聞かず 竜田川  
からくれなゐに 水くくるとは

住の江の 岸に寄る波 よるさへや  
夢の通ひ路 人目よくらむ

わびぬれば 今はたおなじ 難波なる

みをつくしても 逢はむとぞ思ふ

小倉山 峰のもみぢ葉 心あらば

今ひとたびの みゆき待たなむ

みかの原 わきて流るる 泉川

いつ見きとてか 恋しかるらむ

山里は 冬ぞ寂しさ まさりける

人目も草も かれぬと思へば

心あてに 折らばや折らん 初霜の

置きまどはせる 白菊の花

有明の つれなく見えし 別れより

暁ばかり 憂きものはなし

朝ぼらけ 有明の月と 見るまでに  
吉野の里に 降れる白雪

山川に 風のかけたる しらがみは  
流れもあへぬ 紅葉なりけり

ひさかたの 光のどけき 春の日に  
静心なく 花の散るらむ



誰をかも 知る人にせむ 高砂の

松も昔の 友ならなくに

人はいさ 心も知らず ふるさとは

花ぞ昔の 香に匂ひける

夏の夜は まだ宵ながら 明けぬるを

雲のいづこに 月宿るらむ

白露に 風の吹きしく 秋の野は

つらぬきとめぬ 玉ぞ散りける

忘らるる 身をば思はず 誓ひてし

人の命の 惜しくもあるかな

浅茅生の 小野の篠原 しのぶれど

あまりてなごか 人の恋しき

契りきな かたみに袖を しぼりつつ

末の松山 波こそじとは

逢い見ての のちの心に くらぶれば

昔は物を 思はざりけり

あはれとも いふべき人は 思ほえで

身のいたづらに なりぬべきかな

由良のとを 渡る舟人 かぢを絶え  
ゆくへも知らぬ 恋の道かな

八重葎 しげれる宿の さびしきに  
人こそ見えね 秋は来にけり

御垣守 衛士のたく火の 夜はもえ  
昼は消えつつ 物をこそ思へ

忘れじの ゆく末までは かたければ  
今日を限りの 命ともがな

滝の音は たえて久しく なりぬれど  
名こそ流れて なほ聞こえけれ

ありま山 猪名の笹原 風吹けば  
いでそよ人を 忘れやはする

大江山 いく野の道の 遠ければ

まだふみもみず 天の橋立

いにしへの 奈良の都の 八重桜

けふ九重に 匂ひぬるかな

朝ぼらけ 宇治の川霧 絶え絶えに

あらはれわたる 瀬々の網代木

もろともに あはれと思へ 山桜  
花よりほかに 知る人もなし

春の夜の 夢ばかりなる 手枕に  
かひなく立たむ 名こそをしけれ

心にも あらで憂き世に ながらへば  
恋しかるべき 夜半の月かな

嵐吹く 三室の山の 紅葉葉は

竜田の川の 錦なりけり

音に聞く 高師の浜の あだ波は

かけじや袖の ぬれもこそすれ

高砂の 尾の上の桜 咲にけり

外山の霞 立たずもあらなむ



タされば 門田の稲葉 おとづれて  
蘆のまろやに 秋風ぞ吹く

わたの原 こぎいでてみれば 久方の  
雲居にまがふ 沖つ白波

瀬をはやみ 岩にせかるる 滝川の  
われても末に あはむとぞ思ふ

淡路島 かよふ千鳥の 鳴く声に

幾夜寝覚めぬ 須磨の関守

秋風に たなびく雲の たえ間より

もれいづる月の 影のさやけき

長からむ 心もしらず 黒髪の

みだれてけさは 物をこそ思へ

思ひわび さても命は あるものを  
憂きにたへぬは 涙なりけり

世の中よ 道こそなけれ 思ひ入る  
山の奥にも 鹿ぞ鳴くなる

嘆けとて 月やは物を 思はする  
かこち顔なる わが涙かな

村雨の 露もまだひぬ まきの葉に  
霧たちのぼる 秋の夕暮れ

難波江の 葦のかりねの ひとよゆる  
みをつくしてや 恋ひわたるべき

見せばなや 雄島のあまの 袖だにも  
ぬれにぞぬれし 色はかはらず

わが袖は 潮干に見えぬ 沖の石の  
人こそ知らね かわくまもなし

世の中は つねにもがもな 渚こぐ

あまの小舟の 綱手かなしも

み吉野の 山の秋風 さ夜ふけて

ふるさと寒く 衣うつなり

花さそふ 嵐の庭の 雪ならで

ふりゆくものは わが身なりけり

来ぬ人を 松帆の浦の 夕なぎに

焼くやもしほの 身もこがれつつ

風そよぐ ならの小川の 夕暮れは

みそぎぞ夏の しるしなりける